

6、おわりに

今回杉ガ沢と東鉢伏に絞って考えてみたが、尾崎氏によると過去の多産地である生野高原の海拔500m付近で発生していたものは、10♂の平均前翅長が38.4mmあり平地性のもと変わらない大きさであるということである。今後の検討課題としたい。

夏眠については早の生存期間の長さとの関係があるように思える。平地性と山地性との生存期間を比較すると、交尾から産卵まで平地では約4ヶ月かかるのに対して、山地性では約2ヶ月間しかかからず、その期間には2ヶ月の差がある。この期間の短いほど種の存続にプラスとなる。平地における夏眠はこの長い期間に外敵から身を守ることに思える。

次に越冬態の問題であるが、大型ヒョウモン類が、卵で越冬するものと幼虫で越冬するものに分れる原因は、環境などの外的条件によるものではなく、遺伝的なものであると考えられている。しかし不明な点は多いようで、他のヒョウモン類と同様オオウラギンヒョウモンについても1令幼虫で越冬するという説と、卵または1令幼虫で越冬するという説がある。山地性のもので10月下旬に産卵されたものが、孵化する時期は11月下旬となり、この頃の野外(山地)での気温は日平均3℃~4℃とかなり低く、孵化に適していないように思える。今回屋外飼育した(D鉢・E鉢)では枯葉に幼虫が全く観察されなかったこと、幼虫期における成長差が大変大きかったこと等を合せ考えると、一部は卵のまま越冬するのではないかと思われた。

今年9月28日東鉢伏にて採集した早は9月30日から産卵を開始した。10月21日の現在までの22日の間に、1日最高294卵、最低0卵、合計ではなんと1,507卵もの数を記録している。産卵の開始は季節情報によるのか、その他の因子によるのか、通常どの程度の数を産卵するのか、また今回のように多産した場合どの程度まで受精卵となるのか等いろいろと興味あることが多い。

結局わからない事ばかりであったが、本種は年々減少の一途であり、今のうちに調査出来ることはしておかなければ、近い将来姿さえ見るのが困難となるように思う。

また兵庫県この貴重な産地を残すためには、小規模でも人工繁殖を行なう必要があると思う。

現在手もとにある今年の卵で、もう1年観察を続けるとともに、繁殖の方法についても検討したいので、会員の皆さんの御意見をお聞かせいただきたい。

この文を書くに当たって数多くの資料の提供をいただき、また御指導下さった広畑政己、木村三郎、古池末

之の諸氏、採集飼育記録の提供をいただいた浅田卓、岡嶋秀紀、花岡正、戸田智三の諸氏に深くお礼を申しあげる。

参考文献

- 尾崎 勇(1979) 兵庫県のオオウラギンヒョウモン、てんとうむしNo.5 : 53
 白水隆・原章 原色日本蝶類幼虫大図鑑(保育社)
 登日邦明(1974) 淡路島の蝶相II 佳香蝶26(99) : 25-32
 日本気象協会神戸支部 兵庫県気象月報
 広畑政己(1979) オオウラギンヒョウモンの交尾、てんとうむしNo.5 : 42
 福田晴夫他 原色日本昆虫生態図鑑(III)チョウ編(保育社)
 正木進三(1974) 昆虫の生活史と進化
 山本広一・吉阪道雄(1960) 兵庫県産蝶類目録3、兵庫生物4 No.1 : 37~44

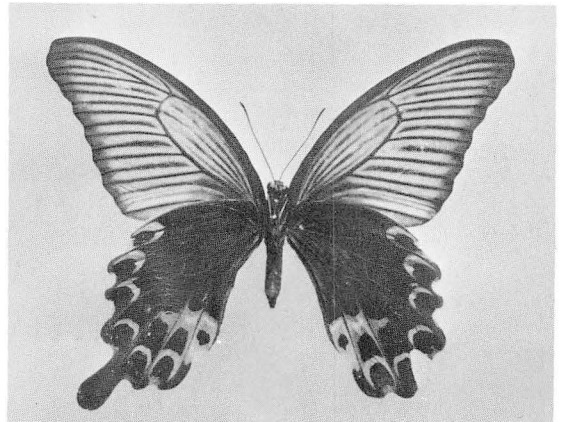
(S.62 : SHINICHI KONDŌ 高砂市)

クロアゲハの赤紋発達型を採集

小坂文之

1981年9月4日に増位山で、赤紋の発達したクロアゲハを採集した。一般的に県下で見られる個体は、後翅裏面の赤紋が小さく、あまり発達しないが、この個体は外縁の弦月赤紋も大きく、また4室まで赤紋が現れている。

姫路市増位山 1♀ 4-IX-1981 小坂文之



(S.61 : FUMIYUKI KOSAKA 姫路市)